

令和4年度第2回伊勢原市食育推進計画策定委員会 議事録

[事務局] 健康づくり課 健康づくり係

[開催日時] 令和4年7月21日(木) 13時30分から15時まで

[開催場所] 伊勢原市文化会館1階 練習室2

[出席者]

1 委員 7名

2 事務局 5名

[公開可否] 公開

[傍聴者数] 0人

[審議の経過]

[配付資料]

- ・会議次第
- ・資料1 「伊勢原市食育推進計画(素案)」
- ・資料2 計画案の体系と数値目標等根拠資料
- ・資料3 目次

1 開会

2 議事

(1) 「第3次伊勢原市食育推進計画(素案)について」

(2) 「今後のスケジュールについて」

(委員長)

それでは議事に移ります。事務局から、説明をお願いいたします。

(事務局)

まず、お持ち頂いた計画素案の1～3章について説明をいたします。

なお、今回送付したものは白黒のコピーのページが多いですが、実際はカラーでの印刷・製本を予定しております。今後体裁を整え、80ページ程度で仕上がる予定です。

全体的に表や字体、行間のずれ、漢字や言葉使いなどの細かいところの直しが仕上がっておりません。誤字脱字も見つかり、最終案までには整えていく予定です。

1ページ「第1章 はじめに」をご覧ください。「計画策定の趣旨と背景」では、国や県における食育の位置づけや動向、また市の計画について、さらに現在の健康に関する社会環境等と新たな基本理念について記載しました。食育に関して連携していく必要のある計画について、2ページ目の図の中に入れました。本市の第6次総合計画が現在策定中でまだ確定しておりませんので、基本政策や施策展開の方向等は決まり次第入れ込む予定です。また第4次食育推進計画の計画期間については5年間とし、前回の計画同様、計画期間と中間評価の時期を明記しました。

なお、神奈川県も今年度新たな食育推進計画を策定中ですが、県に確認したところ、第1回の策定委員会が8月の開催予定とのことで、まだ県の素案とは整合性がとれていない状況です。本市の10月の第3回策定委員会では最終案をお示ししますが、その時までには県の計画と整合性をとる予定です。

3ページ目からの「第2章 第3次伊勢原市食育推進計画における食育の取組」をご覧ください。こ

ちらは平成30年度から令和4年度の前回の計画期間内に、本市で新たに取組んだ食育の紹介ページになっております。

まずは「1 各世代に合わせた食育」として、乳幼児から、小・中学校、高校生、大学生、働き盛りの人、高齢者と、それぞれの世代にあった食育の内容を掲載しております。

次に8ページ「2 様々な機関と連携した食育取組」として、大学、民間企業や関係団体等と連携した食育の取組を掲載しております。

続いて11ページ「3 感染症対策や環境教育と連携した食育の推進」として、新型コロナウイルス感染症が感染拡大したことにより、これまで調理実習や会食を伴っていた事業の見直しをしました。調理の様子を動画配信したり、学校では校内放送の利用、オンライン授業等、工夫をしながら実施した様子を掲載しました。また、持続可能な世界の実現を目指すため、SDGs への関心が世界的に高まる中、食品ロス削減の推進として取り組みましたフードドライブやエコ・クッキングについて掲載しました。今後も他課や関係機関、委員の皆様より、さらに紹介できる取組がございましたら追加できます。第2章は以上です。

続いて15ページ、第3章です。第3章では、伊勢原市の食を取り巻く状況を掲載しております。まず、「1 人口構造の推移」です。第3次食育計画の際は、市の健康増進計画と策定のタイミングが合っており、そちらに人口構造の推移は掲載していたので、食育計画の方には掲載しませんでした。今回、健康増進計画が1年延長となり、改訂時期にずれが生じたので、第4次食育計画に掲載することとしました。17ページ「2 食に関する意識調査結果から」では、前回の策定委員会でもお伝えしました健康づくりに関する意識調査結果等のデータを掲載しました。第3次計画よりかなりページ数が増えております。今後、グラフの大きさなど体裁を整え、コンパクトにできる部分は修正したいと思います。

次に、53ページ「3 第3次伊勢原市食育推進計画の評価」です。内容としましては、53ページに第3次計画の概要、55ページからは1～5の食育目標毎に、評価と課題を載せております。前回の策定委員会で、ただ評価を載せるだけでなく、なぜ達成できたのか、なぜ達成出来なかったのかの理由を検証する必要性についてご意見をいただきました。今回は、第3次食育計画の成果指標達成度の評価に加え、前計画では詳細まで載せていなかった各種食育事業の評価をA～Dの4段階で表記しました。

これまでも食育事業の評価は毎年行い、次年度に活かしておりましたが、今回、成果指標評価と合わせて、表にまとめ掲載をしました。さらに表の下に、意識調査結果等のデータと合わせ、評価と今後の課題を記載しました。目標を達成しているものは食育事業評価も良い傾向で、目標を達成せず後退傾向のものは食育事業評価も低い傾向であることが分かりましたが、中には逆の評価になっているものがあり、そのようなものには事業自体の再検討や事業の目標設定の修正が必要であると感じております。

では、第3次食育推進計画における1～5の食育目標毎の評価と課題をお伝えします。この評価と課題が、第4章でお示しします今回の第4次計画の基本理念や食育目標、基本施策に繋がります。

55ページを御覧ください。食育目標1「食を通じて適正体重を維持しよう」についてです。①の20歳代女性のやせは改善し、目標値を達成しました。さらに食育事業評価においてもA（計画通り進捗した）の割合が88%と高かったです。一方、19ページを見ると、30歳代女性のやせが増加しています。

次に55ページ②の肥満の男性です。第3次計画では30～60歳代に設定して目標を立てていましたが、18ページを見ると特に40、50歳代が目立って増えていることが分かります。32ページを

見ると肥満の方は、ゆっくりよくかんで食べることを意識していない人が56.6%と体格別で一番高く、また45ページをの体力や健康を維持するために運動をしているかどうかに関しても、していない人が64.1%と体格別では一番高かったです。

20ページの高齢者の状況では、やせと肥満が増え、標準体重の人が減っているのが分かります。55ページの食育事業評価をみると壮年期男性の肥満と高齢者のやせが、共にC（計画通り進捗できなかった）の割合が高い傾向です。

56ページを御覧ください。以上から今後の課題は、

- ・青年期世代のやせの改善と、適正体重の維持に向けた食育の推進
 - ・壮年期世代男性の肥満の改善と、運動や歯科保健と連携した食育の推進
 - ・高齢者の低栄養傾向や肥満の方の、適正体重の維持に向けた食育の推進
- とまとめました。

57ページを御覧ください。食育目標2「若い世代も食への意識を高めよう」です。朝食欠食については、⑤の20歳代は改善傾向です。22ページを御覧いただくと、20歳代が改善傾向とは言え、全体でみると年齢が低くなるにつれ、食べている人の割合は低くなります。また、30歳代男性で「ほとんど食べない」人が増えています。

次に23ページは中学生の朝食についてのグラフです。毎日食べている人は5年前の89%をピークに年々下がっていることが分かります。57ページの市の食育事業評価でもC（計画通り進捗できなかった）の割合が17%でした。

57ページの⑦20歳代の食育への関心ですが、女性は増加しましたが、男性では減少しました。38ページを御覧ください。全年代で女性よりも男性の方が低い傾向です。

57ページを御覧ください。以上から今後の課題は、

- ・思春期から青年期の朝食習慣の確立をすすめる食育の推進
 - ・若い世代が食育に関心を持ち、健康に配慮した食生活を送るための食育の推進
- とまとめました。

次に、58ページ、食育目標3「食の自立をめざし、様々な食の体験をしよう」です。栽培・収穫・農業体験についてですが、34ページを御覧いただくと、体験をしたことがある人はわずかに減少しています。58ページの食育事業評価では、A評価の割合が42%と他と比較し、最も少ない状況でした。49ページをご覧ください。今回初めてとったデータになりますが、産地や生産者、環境を意識して食品等を購入している人は1割強です。50ページの食品ロスについてですが、取り組んでいることは特になくはない人は5割を超えています。

58ページ、⑨の地場食材の給食への活用は市内全校で継続できています。

また、⑩の自分だけで食事を作ることが出来る中学生の割合も増加しました。

一方、食育事業評価はコロナ禍の影響もあり、A評価が低く、整合性がとれていない状況です。

以上から今後の課題は、

- ・学校や地域などと連携した地産地消や調理・農業体験を通し、産地や環境を意識した消費等について知識と理解を深める食育の推進
- とまとめました。

次に59ページ、食育目標4「共食を通して食事を楽しもう」です。⑫の中学生が朝食を一人で食べ

る割合は改善し、他の共食に関する指標については改善が見られませんでした。40ページをご覧ください。地域や所属などで共食をしたいと思っている人の割合は20歳代男性と70歳代女性が多かったです。41ページのとおり実際に食事会に参加した人はコロナ禍の影響により全体で21.6%と40%近く減少しました。59ページの食育事業評価でも、コロナ禍で地域に出向く事業ができなかったことが影響し、⑭は、CやD評価があります。

以上から今後の課題は、

・家族や地域ぐるみで、食をきっかけとしたコミュニケーションの場づくりをめざす食育の推進とまとめました。

次に60ページ、食育目標5「食育で生活習慣病の予防をめざそう」です。29ページの、1日に2～3食は主食・主菜・副菜がそろった食事をとっている人の割合では、全体で5年前より減少しています。30ページに性・年齢別のグラフが掲載されていますが、男女とも20歳代が低くなっています。60ページ、食育事業評価ではコロナ禍により事業が予定どおり出来なかったことが影響し、BやC評価があります。

次に健康のために食事に関して心がけていることが36ページに掲載されています。心がけていることはほとんどの項目で5年前と比較して減少し、食育計画の指標としている塩気の多いものやあぶらっこいものを控えることを心がけている人も同じく減少しています。

以上から今後の課題は、

・全ての年代で、主食・主菜・副菜がそろった健全な食生活を送り、減塩や適正な脂質のバランス等に配慮できるよう、生活習慣病予防対策と連動した食育の推進とまとめました。

前半の導入部分については以上です。

(委員長)

ただ今、事務局から説明がありました。ご質問ご意見があれば、お伺いします。

(委員長)

17ページの身体状況についてですが、下に「体格指数で判定しました」とありますが、スペースがあるので、枠の中にBMI 18.5未満というのを入れたほうが分かりやすいと思いました。

(委員)

8ページ中ほどに「小学生・中学生・高校生については市内の全児童へ配布し普及しました」ということですが、全児童ということは私立中学・私立高校も含めてということですか。

(事務局)

私立には配布はしていません。料理コンテストに関しては参加いただくように私立にも周知はしていますが、今回のリーフレットに関してはお願いをしていない状況です。

(委員)

もう1点は、15ページからの第3章の人口構造の推移のところ、人口、年齢別人口、その次のページもありますが、人口は令和4年まで、年齢別人口は令和2年まで、次のページの高齢化率は令和元年までとバラバラなのが気になりました。

(事務局)

統計数値が最新のものを取りたいということで、年齢別人口が令和2年というのは5年ごとの国勢調

査からとっております。世帯数と1人当たりの人員は令和2年の国勢調査ですが、令和4年で推定人口というデータが取れているので、最新のものを載せています。それぞれの資料で最新のものを拾っているとどうしても合わないのですが、最終案を作る段階でどこまで揃えるかということも考えていきたいと思えます。

(委員)

55ページからですが、今回食育事業評価を入れられたのは非常に良いと思えます。それと食育目標1の評価の次に、今後の課題が入っているところは分かりやすく良いと思えますが、食育事業評価のところについて、各16項目すべてに入っているわけではないですね。例えば文言ですが、基本施策1のところで、「市の食育事業評価においても、A(計画通り進捗した)の割合が88%と高い結果でした。」とありますが、これは数値を見れば分かると思うので、ここで入れるとしたら、なぜ高いのかなどの理由を付け加えたら良いかと思えます。

基本施策2は「Cの割合が33%と他と比較しても高い傾向でした」とありますが、「他」というのは多分全体の「他」のことを言っていると思えます。パッとこれだけ見ている人は、この中での「他」とみてしまう可能性もあると思えます。そういう意味でも、数字だけ述べるのではなくて、何か原因があればコメントを入れたほうが良いかと思えました。以上です。

(委員長)

ありがとうございます。事業評価のところですね。何で88%になっているのかというところを、もう少し説明や経緯が分かり、事業毎の評価が表に出るような形にしたほうが良いということですね。

(事務局)

事業自体は全部で約55ほどあり、全ての事業を入れるのはページ数的にも難しいですが、代表的なものを入れるということですね。

(委員長)

そうですね、代表的なものを明記していただくとよく分かるのかなと思えます。他にありますか。

(委員)

11ページですが、感染症対策をした食育事業が、多くの課が実施したものを持ってこられたのかと思うのですが、事業の所管や主体が分かりにくいので、分かるような表記があると良いと思えました。

(事務局)

例えば「子育て支援課の母親父親教室の様子」というような事業担当も表記するということですね。

(委員長)

基本的にそれぞれの食育事業では感染症対策をしていると思うので、その事業の所管を明確にしていきたいと思います。

19ページの説明ですが、「前回調査と比較すると女性は30歳代を除く全世代で肥満の割合が増加しています。一方で30、50、70歳代でやせが増加しており、特に30歳代で大きく増加しています。」という形で、特に30歳代女性のやせが8.1から19.5と伸びているところに注目されています。一方、私はこのグラフを見た時に、70歳代女性が肥満も増えてやせも増えているというところも気になりました。他の年代に関しては肥満が増えると逆にやせが減っており、それほど両極化しないのですが、70歳代女性については、やせも増えて肥満も増えているということは、適正体重に保つのが難しくなり、二極化してしまう層として注目していかなければいけないと思えました。そこを計画に加味していただいても良いかと思えます。

(事務局)

70歳代女性について少し触れた方が良いでしょうね。

(委員長)

そうですね、今後フレイルなどの施策を進めていくのであれば、この結果は非常に興味深いです。他はやせが増えれば肥満が減るなどのバランスがあり、特に30歳代のやせが増えているというのは非常に顕著な形で見えています。両方増えるというのは、適正体重の保持が難しい対象かという印象です。少しこれを課題に追加していただいても良いかと思います。

ページ余白がいくつかありますが、今後どうなりますか。

(事務局)

詰められるものは詰めていく予定です。

(委員長)

国民健康栄養調査のデータ等を参考として入れ、比較としても良いと思いましたが、詰めるのであればそれでも構いません。

(委員)

第3次食育計画のように、食育コラムを入れるのも良いですね。

(事務局)

この5年間で取り組んだ食育普及の成果物などもありますので入れたいと思います。

(委員長)

そうですね、このデータに関わるような食育取組やコラムは入ってもいいかなと思います。

あとは評価の部分が一番重要かと思います。事業評価ができていて、それが現状値のパーセントと結び付けて考える事が重要だと思います。なかなか食育事業評価をきっちりやっているところはなくて、伊勢原市は進んでいると思います。たとえば下がっているのは当然Cの評価で、Aが多いのに現状値が伸びてこないとなると事業評価の見直しをしなければいけないということが、この表を見てくると一目瞭然で、原因と結果が非常に明確になり、第4次に向けての新しい事業提案をしていくときに、どう改善しながら構築したらいいのかという礎ができ、とても分かりやすくなったと思います。データは嘘つかないですね。

(委員)

計画書本体を一般向けには出さないと思いますが、計画書の構成として、第4次食育推進計画の内容にたどり着くまでのページが多いのでかなりページをめくっていかないとたどり着かないのが気になりました。

(委員長)

逆が良いでしょうか。

(委員)

積み上げたデータが増えてきているので、こうなってきたのだと思うのですが、どちらが良いでしょうか。

(委員長)

計画書の構成ですね。

(事務局)

一般向けには概要版という10ページくらいのを前回の第3次食育計画では作成しました。最初の3ページ目の段階で体系図が出てくる形式にはなっていて、今回も作成予定です。確かにデータ量は前回の第3次の計画より増えていますので、冊子で1ページ目から読み始めると第4次計画の内容や体系図にたどり着くまでは時間がかかると思います。

(委員長)

背景や現状があり、その上でどう考えて作ったという構成が展開としては良いかと思うのですが、目次を見て第4次計画だけ見たい人は、第4章から見てもらうというのでも構わないし、一般の方々には概要版が配布されると思うので、関係者の方々には、最初から詳しく見ていただきたいですね。

(事務局)

計画の冊子自体は一般の方に配布するケースはあまりないです。ただホームページにはPDFを載せていく形にはなります。一般の方には、概要版を講座等の中で配布しています。

(委員長)

そうですね、一般の方も見れるようになっていれば良いですね。

(委員)

市では他にも様々な計画がありますけれども、それらの計画とは若干違うように思います。この食育計画は前計画を評価し新たな課題を発見する、それができたら次の計画は、今やったことを評価していくという流れなので、前段にやったこと、それを踏まえての評価というのが出てくるから、ページ数が増えるのは致し方ないのかと思います。

(委員長)

そうですね。食育のPDCAサイクルが回っているのですね。事業評価をしてそれを踏まえて改善して、次に実行していくということはとても重要な事なので、この形式で、第3次食育計画の評価をして、その上で第4次食育計画をレベルアップするために考えているという形になっているので、これで良いかと思います。

(委員)

計画を読んだ感想です。第2章の食育の取組について4ページの中学校給食ですが、私が中学生の時はまだミルク給食で、同じ班に毎日コンビニで買ったり、菓子パンしか食べていない子がいて、親が忙しくて用意ができない子もいるのだとそのとき思ったので、給食ができて良かったと感じました。5ページの大学生の食育について、学食内で掲示したりレジ横にポップなどもあり、自然に目につく場所にあるので、無意識に情報が取り入れられるのが良いと思いました。13ページのフードドライブでは、一人暮らしの学生が無料で食材をもらったはいいけど、結局どう使っていいかわからなくて無駄にしまったという話を聞いたことがあるので、この食材を使ってどういう風に料理が作れるかという例も一緒にもらえると食品ロスも少なくなるのではと思いました。

(委員長)

このフードドライブというのは、配るだけではなくてその使い道まで分かっているとSDGsにつながらないですね。

ほかにありませんか。ないようですので、議題(1)の続き、「計画素案の4章」について事務局から、説明をお願いいたします。

(事務局)

61ページからの「第4章 伊勢原市がめざす食育の方向と考え方」を御覧ください。

基本理念ですが、第3次計画までは「食で育むいのちときずな」としていました。第4次計画では、市民一人ひとりが生涯を通じて健康を目指す大切さに加え、国のめざすSDGsの考え方と、また国の食育計画の重点事項を取り入れ、本市の食育の取組が持続可能な未来に、そして次世代へと繋がっていくことを目指し「食で育み未来につなげるいのちときずな～生涯を通じた心身の健康と持続可能な食を支える食育の推進～」としました。

そして、2つの視点を設定しております。

一つ目が「市民一人ひとりの健康を支える食育」、二つ目が「次世代につながる食を支える食育」です。

一つ目の視点の「市民一人ひとりの健康を支える食育」には3つの食育目標を設け、「食育目標1 食を通じて適正体重を維持しよう」「食育目標2 若い世代も食への意識を高めよう」「食育目標3 食育で生活習慣病の予防をめざそう」としました。

また、二つ目の視点の「次世代につながる食を支える食育」には、「食育目標4 食をきっかけにコミュニケーションを深めよう」「食育目標5 食と環境の調和を理解し感謝の心を育もう」を設定しました。

64ページに計画の体系を掲載しております。左から、基本理念、視点、食育目標、基本施策です。そして施策に対応するための食育事業、取組の抜粋が記載されています。一番右側に評価指標と令和9年度に達成したい目標を記載しました。基本施策は13項目で、62、63ページに記載されている食をめぐる現状に対応するものとして整理しました。

そして、5年間という計画期間の中で効率的に食育を進めていくために、引き続き重点目標を設定します。食育目標1の「食を通じて適正体重を維持しよう」と食育目標3の「食育で生活習慣病の予防をめざそう」を重点目標とするのはいかがかと考えております。第3次計画で目標の達成が進まなかった点に加え、高齢化が進む伊勢原市において、若い世代から高齢者まで自身の適正体重を知り、生活習慣病を予防し、健康寿命の延伸を目指した食育に力を入れたいと考えております。

資料2を御覧ください。赤い字で記載されている部分が、新たに設定した項目と第3次計画から変更したところです。食育目標4の「食をきっかけにコミュニケーションを深めよう」という表現ですが、コロナの収束が見えず、共食がまだ難しい中、「新たな日常」やデジタル化に対応した食育などの工夫が可能と考え、食をきっかけに社会的交流につながるよう、コミュニケーションをとることを表現しました。

また食育目標5の「食と環境の調和を理解し感謝の心を育もう」ですが、全国的にSDGsをはじめ、環境問題が重要視される中、国の計画でも食と環境との調和の推進が取り上げられており、本計画でも設定し、「持続可能な食や食の安全性等に関する関心を高め、知識を得られる食育の推進」という施策を加えました。

令和9年度の目標値ですが、本市の現状と国が打ち出している目標値などを参考に①～⑯項目について算出いたしました。

今回、健康づくりに関する意識調査の結果をみると、痩せや朝食欠食の状況がこれまで悪かった20歳代だけでなく、30歳代も悪化している傾向がありましたので、前計画で20歳代を目標値として設定した①の痩せや⑤の朝食欠食、⑦の食育への関心については、20～30歳代を合わせた目標値と変更しました。同じように②の壮年期肥満ですが、特に悪かった40～50歳代をターゲットに目標値を設定しました。

悪化傾向の②の壮年期男性の肥満や⑥の中学生の朝食欠食、⑧の主食・主菜・副菜をそろえた食事、⑨の塩気や油っこいものを控えることについては、まずは悪化傾向を食い止め改善傾向へと向かわせ、確実に目標を達成するために、5年前の結果値との差に対して、5割戻す目標値としました。

⑯の地場食材の給食への使用ですが、この5年間で市内10校全てに継続使用でき、定着がみられたので、さらに使用回数を増やす目標値を新たに設定しました。

そして最後に⑰食品ロス削減のために、何らかの行動をしている人の割合を50%以上とするという目標を新たに加えました。

数値目標設定の根拠につきましては、資料2の「課題等」や「他計画 参考目標値」を御覧ください。

第4章は以上になります。

(委員長)

ただ今、事務局から説明がありました。第4章までの部分で委員の皆様にご意見をいただき、第5章以降の食育施策の具体的な内容にしていきますので、ご質問ご意見があれば、お願いいたします。

この理念は良いですね。未来につなげるとか、持続可能とか、SDGs 的な観点が盛り込まれているなと思います。

(委員)

資料2を見ると、この数値に目標を設定した根拠がよく分かりますが、資料2というのは実際に計画書の中には出てこないということですね。今回目標設定や重点目標を変更しているのも、その理由や変更したねらいが61ページの基本理念の次に入ってくると分かりやすいかと思いました。

(委員)

資料2を見ればよく分かるのですが、今回すべての世代で肥満が増加しているのに、40～50代の男性に絞った理由や、食育への関心がある若い世代についても、20代だけだったのを20～30代に変更していますよね。30代の関心が低いから30代を加えたのだと思いますが、なぜそもそも第3次の5年前は20代に設定したのかなというところが分かると、次回も評価をしやすいのではと思います。ここが目標達成に至らなかったのも、今回はここに力を入れたいなど、そこが明文化してくると良いと思いました。

(委員長)

そうですね、62ページに食をめぐる現状という項目は立てられているのですけれども、その内容が明文化されている方が、特に変更されていることに関しては説明があった方が分かりやすいかなと思います。ありがとうございました。

(委員)

評価についてですが、今回問題だった20代の方が5年後には、20代後半の方は今度30代に入るなど次の年代に入った時に、20代にアプローチした評価が抜け落ちてしまうかもしれないと感じており、どう拾ったら良いのかは分からないのですが、年代は動いているので、網がかかるような何かがあるといいのかなと思います。課題を引きずってしまうようにも思いました。

(委員長)

今、20代の後半であると、次回最終評価では、30代になっていますね。

(事務局)

10年刻みの年代でデータを出しているのもその狭間に関しては難しく、高齢者に関しては65歳以上のところで区切ってデータを別に出すことは業者さんにさせていただいていますが、20代だともともと回答者の数も少ないので、ひとくくりにしてしまっている状況です。

(委員長)

実際の20代の方々の取ってきている数が、男女がそれぞれ40人位、全部入れると80人位しかいないです。年齢構成で同じ比率を取ってきているので。そうすると80人くらいいる中で、20代で後半前半位なら何とか15人位で分けられるのですかね。

(事務局)

生データ自体ももらっているのも、見られる可能性はありますが、数としては少ないです。

(委員長)

区分は5歳刻みくらいにしておき、今後どう動いていくか見ていくという形が良いでしょうか。

「食をきっかけにコミュニケーションを深めよう」という食育目標4ですが、前は「共食を通して」という表現を、コロナ禍でもあり、表現を変えているという部分と、食育目標5は「食と環境との調和を理解し、感謝の心を育もう」と変えています。こちらは一つの流れとして、SDGsの観点を入れながら感謝という言葉を入れているのだと思いますが、この目標の新しい変更に関しては皆様いかがでしょうか。

また、次世代につながる食を支える食育という観点が、第4次食育推進計画では重要で、大きい括りとして、市民一人ひとりの健康があってそれが次世代の食を支える食育としても考えられていくという枠組みになっており、それを踏まえながらそれぞれの細かい、目標値が設定されていますが、こちらのについてもいかがでしょうか。

5年間で悪化したものに関しては、5年間で一気に取り戻すのは難しいと思うので、5年前の結果に対して10年くらいかけて、約5割ずつ戻すということで事務局で設定をしていますが、こちらはいかがでしょうか。

(委員)

ひとつ気になったところが、(8)の⑩で朝食を一人で食べる中学生の割合なのですが、53.3%が46.7%ということで、50%以下が目標で、目標達成してまた再設定という形になったと思います。一方、前回の会議で、目標達成できたのがコロナ禍で家族が揃った影響があるのではないかという風に分析されていたのですが、この5年間でコロナ禍が改善して家族が朝、揃わなくなる可能性を考えると、この目標設定はどうかと思ったのですが、いかがでしょうか。

(委員長)

中学生の朝食・夕食の孤食については、第3次計画から継続している目標だと思うのですが、近年の子供たちのライフスタイルの変化が、例えば塾に行かなければならないとか、部活がコロナ禍が明けて始まるというところがあると、この共食を中学生に限ったデータで取ってくるのは、どうなのかなというところは皆様方に検討していただきたい部分でもあります。実は国では、中学生で孤食についてはデータを取っていない人で、1日に1回も共食していない人などと全ライフステージで見えています。それは多分、近年の中学生や高校生のライフスタイルの中で、新たに目標値として定めても、それが本当に可能であるかどうかということ考えた上で、検討しているのだと思います。共食するというのはとても重要なことで、今回も「食をきっかけにコミュニケーションを深めよう」という表現に変えているので、中学生のところだけ共食をする回数やパーセントを決めるということではなくても良いのではと思うのですが、いかがでしょうか。朝、部活がある日は、家族みんなで早起きしてご飯を食べる、という方法もありますが、夜は塾があるなど、中学生のライフスタイルとして定着している中で、数値としてはなかなか伸びていかない気がします。

(委員)

私も元々、朝食を一緒に食べるかどうかというところの数字を取るのには、家庭状況の影響も大きく、国の様に全体のライフステージで捉えるのは良いと思いますが、中学生だけを取るのはいかがでしょうかという思いはありました。

(委員)

私もやはり、中学生だけに絞る必要性はないと思います。

(委員長)

国では第4次計画では、朝食または夕食を家族と一緒に食べる共食の回数を1週間で11回以上に行っています。1週間で朝食と夕食は14回あるわけですが、令和2年度の現状値が、全国平均で9.6回です。それを1.4回増やして週11回以上にする目標ですが、これは全国民が対象です。中学生等の

子どもたちの年代が共食の率が低くても、高齢者のみ世帯などは基本的には一緒に食べる人が多いので、国としてはあえて全年代の率をとっているのだと思います。中学生だけに限定するというのはそこに特別な教育的な意味があるとすれば、とても必要なことかと思うのですが、いまのライフスタイルを考えると、中学生だけにとすることはやはり難しいと思うので、中学生に限定するのではなく、全体に対して1日に1回も共食していない人の割合で見えていくという形でもよろしいですか。

(事務局)

国の計画は中学生の共食についてはないので、それに合わせるような形で良いでしょうか。

(委員長)

そうですね。それで良いかと思います。現状に即した形での目標設定がなされるのが食育推進計画の良いところだと思います。

(委員)

「自分だけで食事を作ることができる中学生の割合」で今まで目標値を取っていたところを、「家で料理の手伝いをしている中学生の割合」に変えた理由を伺いたいです。今までは食の自立をめざし、様々な食の体型をしようとしていた食育目標ですが、少し自立が緩まるのではと感じました。料理の手伝いをしている数を増やしてコミュニケーションを深めるという目標設定の変更についてご説明をお願いします。

(事務局)

自分だけで食事を作ることができる中学生の割合についてですが、目標は70%以上と出していたところが、今回かなり増え89.7%と、ある程度上限値のような状況でした。同じ設定の項目で新たに目標値を高く設定するという方法もひとつかと思いましたが、中学校2年生に取っていただいているアンケートの項目の中で、「家で食事のお手伝いをしていますか」という項目があり、その中で「後片付けをしている」とか「テーブルの準備をしている」など、色々食事のお手伝いの項目がある中で「料理の手伝いをしている」という項目がありましたので、その現状値を確認したところ、R3年度は45.7%でした。平成28年度は31.8%でしたので、この数字自体も少し増えてきているという状況です。国ではこのような中学生の料理実施状況などの項目は取っていないですし、健康日本21の方でも特にこういった項目はありませんでした。ただ料理を何かしているというようところが分かるようなアンケートの項目を探した中で、こちらの項目が従来より取っており、5年後の目標値設定と現状値も分かる新しい項目ということで、案として挙げさせていただきました。

(委員長)

自分だけで食事を作る事ができる中学生がかなり伊勢原では増えてきていますね。今、委員が言われたように、自分で食事づくりできるかどうかから料理の手伝いへの変更は、今後中学生のところで共食の数値をとらないとなると「食をきっかけにコミュニケーションを深めよう」という食育目標において、自分が家族の中のひとつの役割として参加することは、まず食事づくりができることよりもう一步進んでいるとも考えられ、料理の手伝いをしている中学生の割合は食事がつくれる割合より低くなりますが、積極的に家族とコミュニケーションを深めるという意味ではこの指標は興味深いと思います。いずれにしても、これは伊勢原市は独自で食育料理コンテストを実施しているからできることですね。ずっと伊勢原市がやってきた料理コンテストが、小・中・高校までつながり、経年的に引き継がれているからこそ自分で作れて、それが自分で作れるようになったら今度は家族のために作ってあげようというところへいければ、1つ進んだのだと評価できます。伊勢原市としてはすごく重要な目標設定なので、いずれにしても自分で料理ができるようにするままでいくのか、料理の手伝いというようにもう一步難易度を上げるのか、議論していただければと思います。いかがでしょうか。

(事務局)

おそらく割合も少なくなるので料理の手伝いの方が難易度は上がると思います。

(委員長)

料理を自分でできるかどうかと聞かれたらできると答えるけれども、できる自分がいて日常的に作って家族を助けるかどうかという話になると、難易度は上がり、半分くらいには減るのですね。でもそれが、学校教育のカリキュラムの中で展開できますか。

(委員)

そこですね。これを目標とし、学校で、誰がどう取り組むのだろうと考えた時に、その方法について想像できなかったので、「こういう目標を設定したから取り組んでください」という投げかけや方法を検討する仕組みを作っていないと難しいと感じました。また、自立から、誰かのために料理を作るといふ今の話ですが、私はこのアンケートにも携わっており、どちらかという料理の手伝いというのはお茶碗を出すとか片付けるなど、レベルが高くない内容も入ってしまっていて、この数値で取るのは、どうかとも思いました。ただコミュニケーションを目標にしているので、そこから誰かのための食事づくりをするという目的で目標設定し、取り組むというのもひとつとも思いました。直接的に私たちは指導しているわけではないので、中学校で取り組むのにどのようにすればよいかという思いがあります。

(委員長)

色々な全国調査を見ても、小中学生が、料理はできるという子は多いです。でも実際に家で家族のために料理を作っているのかと聞くと、小学生はしているけれど、中学生になると忙しく家庭ではさせていないという現状もあり、中学生の方が低いです。中学校では、1日分の食事献立を立てて作れるようになるのが家庭科の目標であり、子供たちは作れると言いますが、家庭で本当に実践できているかというところまでできておらず、中学校を卒業して20代になって、独り立ちしてきた時には、やはりできないままということがあります。それらを踏まえると、小中学校でどう継続していくかという意味においては、有効な目標だと思いました。

一方、それを学校の中でどのように教育していくかという仕組み作りを今後していかなないと、数値が全然伸びないだろうと思います。食育の中での食の自立の本当の姿を考えていくと、行動してみても初めで正解であり、いくら学んでも、高齢者になって奥様が亡くなった時に男性は料理も作れず困ってしまうというようなことを最終的になくさなければならず、そういう意味では、学んだことをすぐ実践に結びつけるこの取組は重要ですが、その仕組み作りが重要ですね。

(委員)

市の食育推進連絡会議などで教育委員会等に、明確に提示し、周知していただくというのがまずひとつかと思います。

(委員)

家で料理の手伝いをしている中学生という目標ですが、この料理の手伝いというのは、例えば少し盛り付けを手伝うだけでもいいのでしょうか。

(委員)

多分丸にしてくると思うので、難易度が下がるのではと心配な面もあります。

(委員)

アンケートを取っても料理の手伝いの範囲が広すぎてしまうな、という感じがしますが、まずはやってみても良いのかなと思いました。

19ページの70歳以上の女性の肥満とやせが増えている理由がよく分からないです。理由が明確になり、指標に反映できると興味深いと思います。

(委員長)

ちょうどコロナ禍の時期のアンケート調査なので、動かなくなって太ったという方とご飯を食べなくなってやせたという方の二極化が、一番表れてくるのが高齢者だという考え方もひとつできるかなと思います。また、高齢者の場合は太ってもやせていてもフレイルとなります。特にアメリカのデータだとBMIが30以上だと肥満フレイルと言われるように、体重だけが多いけれど筋肉は付いておらず脂肪の割合が多く、フレイルが進んでいるということがあります。太ってもフレイルなのです。だから体重だけで判断出来なくて、筋肉量や活動量も確認していかないといけないのが、高齢者の肥満の難しいところですね。でも女性の20代に肥満が増えたのはなぜでしょうか。学生がオンライン授業などで学校に行かなくなったからでしょうか。

(委員)

いずれにしろコロナ禍の影響がかなりあるということですね。

(委員長)

あるのだと思います。その辺は注視していかないといけないのですが、コロナがこの5年間で収束するかどうか先が読めない状況で、社会活動はできるようになっていくのでしょうか、この状況でいくと二極化がもっと進むかもしれないということ踏まえて、考えていただいてもいいかもしれないです。

(事務局)

高齢者のやせもそうなのですが、前期と後期高齢者の違いもあるのかと考えています。70歳代肥満が増えているのが70代前半なのかかもしれないなど、そこをもう少し探してみます。

(委員長)

70歳以上の年代をもう少し分けてみても良いかもしれないですね。

(事務局)

目標値の④は高齢者の肥満の設定はしておらずやせの割合しか入れていないのですが、目標値も、適正体重の人を増やす目標値に変えた方がよいでしょうか。

(委員長)

適正体重の維持という視点で設定すれば良いとも思うのですが、70歳代肥満の方を細かく区切り、その現状を踏まえて考えていただければよいと思います。コロナ禍で活動量が減って、太っている人は増えていると思います。

また⑯の学校給食での地場食材の使用ところで、お伺いします。県や国では地場産物の使用について金額ベースや食品数の割合で目標値が決まっているのですが、そういった方向性に合わせるということは可能でしょうか。

(委員)

地場産物を取り入れている仕組みが何パターンもあり、ここは多分地域の皆様とつながる取組として目標設定されていて、国から言われている地場産物を取り入れる回数が決まっていることを考えると、例えば生産者さんからではなくて地域の八百屋さんから入ってくるなど、違うルートから入ってくるパターンで地場産物を使う場合もあるので、そちらを合わせると国の目標に近づいていけるのですが、そこを地域の方たちと繋がりながらやる目標として前回入っていて、また今回も入っているのかなと思っています。要するに現状より増やしたいというところがちょっと見えにくかったので、表記の仕方を考えたほうが良いと思います。地域と絡めた指標にするのか国の指標にもっていくのかということなのですが、私としてはここに地域との繋がりを書くことによって農協さんとか生産者さんと繋がってくるので、設定としては伊勢原市はこれをお願いしたいと思います。

(委員長)

国や県の目標値で示されているのは、県では神奈川県産の食材の食品数として、それを使っている割合が30%以上、国ではその割合を金額ベースで現状値から維持、向上した割合が90%と、それは第3次計画のときからほぼ変わらずそれが上限値だろうと言われており、他の県や全国的に見てくるとほぼ8割は国内産で給食はできています。県内産で考えていくと30%くらいがどこの県でも達成できていて、伊勢原市の中で例えば米などを、1食260円の給食の中で、県内産、国内産と組みわけができれば、国と同じような金額ベースの表記ができるのかなと思ったのですが、いかがでしょうか。

(委員)

まずは国内産、県内産より市域や学区などは地域とのつながりを指標にしたいというのがあるので、現状の指標で良いと思います。国の調査も、その年によって金額ベースや品目数ベースなど変更が多く安定した統計数値が取れにくい状況があります。

(委員長)

伊勢原市の学校給食の米は県内産なのですか。

(委員)

県から指定があり、県内産、特に伊勢原産がある時は入れていただくという約束になっているのですが、伊勢原産は美味しいので県内でも人気があり、新米が出てから半年程経つと他の地域の米も混ぜないと間に合わなくなるというのが現状です。

(委員)

県内産も間に合わないと県外産も入ってきますし、神奈川は県内の学校数が多いので県内産で均等に割り振っていただいても、どこの地域も年間通して使うというのは難しい状況です。牛乳も伊勢原は有名産地なのですが伊勢原のものだけを使って作るのは工場の仕組み上難しく、いろいろな地域の牛乳を集めて作っています。

(委員長)

学校給食で優先的に地場産物を使えるようにできる仕組みができないでしょうか。

(委員)

希望は出しますが、米や牛乳に関しては県で調整して指定がきます。県内産で数値目標を立てると現状と合わなくなり難しいです。

(委員)

JAとしても地元の子供たちに地元のもの食べてもらいたいという想いはありますが、行政の調整が入ると難しい部分はあると思います。

(委員)

別ルートで農協さんのほうから購入するという仕組みを立ち上げられればありがたい気はします。数年前までは青年部さんのほうで全校にご協力いただいたりして助かっていました。

(委員)

農協の合併後は、それはできていないです。

(委員長)

またそのような地元農協との仕組みができるといいですね。

(委員)

質問なのですが、昨年から中学校の給食が始まっているかなと思うのですが10校というのは中学校も含めてですか？

(委員)

いいえ、10校は小学校です。中学校は同じ業者さんを使うときもあるのですが、違うルートから業

者さんをお願いしている部分もあります。ただ市内の八百屋さんも小学校と同じように使わせていただいております、市内のものが沢山市場に入っている時は伊勢原産の野菜が業者さんの方に届けられています。地場産の生産者さんが直に納品していただくというシステムは、量的にも難しいと思います。

(委員)

せっかく中学校の完全給食が始まったので、何かの目標設定で中学校の給食も入れられるとよいと思いました。

(事務局)

今回の案の⑯の目標の表現は直した方が良いでしょうか。

(委員)

括弧書きの部分の表現が分かりづらいと思いました。

(事務局)

括弧書きの部分は、計画書には入ってこないものです。

(委員)

では括弧書きの部分は私たちが理解すれば良いので大丈夫です。要するに全校10校が11回に増やすという目標を作っています。

(委員)

⑬で、この目標が食をきっかけにコミュニケーションを深めようという意味としては良いと思いました。前回までの、自分だけで食事を作ることができるというのは、やはり作るということではできると思うのですが実際やっている人となると、料理の手伝いという意味がどこまでを示しているかという問題はありますが、今回の指標の方が、この目標としては良いと思います。学校での食育で料理を作る機会が増えて、食事を作ることは好きですが、買い物からはしないでそのまま成長し、買い物をする時にこの料理に肉が何グラムなど全然分からず、食品ロスに繋がってしまったりすることもあるかと思うので、こういったことを中学生くらいから学べると、大人になってから料理もしやすいのではと思いました。

(委員長)

実際に買い物の手伝いなどの項目も少し入れた方が良いということですか。

(委員)

この計画の目標に対して、中学校での食育が難しいということだったので、そういうことが学べたら良いのではと思いました。

(委員長)

その料理のために、何をどれくらい買ってきたらいいかということですね。

(事務局)

中学校2年生にとってのアンケートの中では家でする食事の手伝いの内容をさらに細かく聞いて、買い物・料理の手伝い・テーブルの準備など項目別の割合を出すことができます。資料に入れていくことはできます。

(委員長)

高齢者の共食のところはいかがでしょうか、この目標値で大丈夫でしょうか。

(事務局)

現状、まだ地域での共食については、食育取組としては難しい状況です。

(委員長)

例えば地域などで共食したいと思う人が過去1年間に共食した割合で、高齢者の場合はコロナ禍でそ

ういうところをなかなか進めにくいですが、そのような中でも取組ができればいいなと思います。

(委員)

昨年度市と共同で高齢者向けのレシピ集を作成しました。すごく簡単なレシピなのですが市販品をアレンジしたものや冷凍品、缶詰を使ったものなど、会員が考えたものを一つの本にしたのでそれを市民に配って作っていただくという活動をしていくところです。しかしまた感染者が増えてきてしまったので実際に参加者の皆さんがどれだけ活動の場に来ていただけるのか読めない状況です。

(委員長)

バーチャルな共食の機会などもいかがでしょうか。

(委員)

実際、動画で配信されても高齢者は操作できる方もそうでない方もいて、どこまでデジタル化を進めるか悩むところです。私たちが作成したとしても動画の配信数が伸びるかということ、高齢者向けで考えた場合にはそれほど伸びないのではと思います。

(委員長)

目標設定が難しいですね。

最後⑰のところの50%が、この食品ロス削減のために何らかの行動をしている人というのが、国の場合は80%であり、伊勢原市は低く現状38.4%なので、SDGs 的なところではこれから取り組みがいがあり、また普及のための仕組み作りを考えていただければと思います。

(委員)

アンケートの取り方にもよると思います。食品ロスの説明を入れると数値がぐっと上がるかも知れないので、アンケートを取る時の設問の表現について考えた方がいいのかなと思います。

(事務局)

食品ロス削減のためにやっているという認識がなく、日頃から取組んでいる方もいると思います。

(委員長)

このデータは50ページに載っていますが、これを年齢、性別で分けてみていただいてもいいですか。どの年代かが分かれば、食品ロスへの理解のところが探れるかもしれません。

ほかにありませんか。

これで本日の議題はすべて終了いたしました。それでは、議長の役を解かせていただきます。

(事務局)

以上で、本日予定していた案件はすべて終了いたしました。委員の皆様、ありがとうございました。